ぼくはロボット。

大西

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼくはロボット。

【Ｎコード】
Ｎ２２５８Ｈ

【作者名】
大西

【あらすじ】
ロボットの「ぼく」は欠陥ロボットだ。「ぼく」は自分が欠陥品であることについて悩んでいる。他のロボットの高性能を羨む彼が思うこと、感じること、考えること、それは……。

（前書き）

みなさまはじめまして、大西　ひろ詩です。
初投稿で機械音痴なためいろいろ「これでいいのか……」と不安です。評価・感想心よりおまちしております。

今日もいい天気ですね。
あ、どうも、５４８６７番です。こんなに天気がいいのに、ぼくは出かけられません。何故って？　人間様たちが花粉症、と呼ぶものとよく似た症状が出ているからです。はくしょん。あ、失礼。つば飛びました？　これ、どうぞ。ハンカチ。
昨日はぼくらの歴史を学びました。ぼくの接続口という接続口はすべて塞がってしまっているので一から読む羽目になりました。隣の５６９７５番や３６５７１番は接続して同期するだけでいいのに、ずるいですよね。そんな訳で、チャペックの「ロボット」を、約一時間で読み終えました。興味深いですよね、ロボットという単語は彼が創ったらしいです。まあ内容は褒められたものではありません。なぜならぼくらロボットが反乱を起こすなんてことはありえない。その手の話を初めに創ったのが彼ですけど、まったくのナンセンスです。Ｆ・Ｋ・ディックやアイザック・アシモフなど、数えきれないＳＦ作家たちが同じ様なことを書いてきましたが、どうです。
ぼくらは彼らの理想の形――まるで本物の人間と見紛う容姿、顔も形も髪の毛も肌の色も瞳の色もそれぞれ違う――、機能――掃除、洗濯、家事、爆弾処理等――その他諸々を持ちながら、人間には必要ないものだけを徹底排除し、ついにまったく理想の、人間に都合のいいロボットが。自分で考え、いちいち人間の指示がなくとも動くことができる！　夢のような機械です。
ぼくらロボットは従順で何でも言うことを聞く。何故かって？　これはぼくだけが知っている秘密なんですが、反乱なんていう概念がプログラムされていないからです。だってどう考えてもそうでしょう？　殴られ叩かれこき使われ優しい言葉の一つもかけてくれないというのに、彼らは文句の一つも言わず、主人に尽くし、気を遣い、インストールされた語彙の中から言葉を選び、労いの言葉を、

祝いの言葉を、声のトーンと表情を情報から組み合わせ、人間たちを満足させることにしか興味がない。

それで、仲間のロボットを観察していて、気付いたんですよ。あ、反乱という概念がないのか、と。どうしてぼくだけが知っているのかといえば、それはぼくが欠陥商品だから。ぼくにはこういうロボットに必要不可欠な部分が欠落しているのです。ロボット失格ですよね。

毎日修理してもらおうと修理部屋に通っているのですが、技術者さんたちはぼくを相手にしてくれません。そして欠陥品のままでは仕事が来ません。買い取り手もいません。開発室に相談しましたら、「そんなに暇なら日記でも書いとけ」と言われたんで、いまこの日記を、紙とボールペンで日記を書いているわけです。ぼくの容量は１ギガにも満たないうえに恐ろしく「重い」ので――製品テストの結果です――これら全ての情報を一片に入れるのは非常に困難なのです。まあ紙とボールペンでの方が得意だからいいんですけど。２６８番や２５４７５３６番みたくぽぽっとやってみたいものです。

が、文句は言えません、開発者さんや技術者さんたちはこんな欠陥ロボットなんかに構っている暇はないのですから。

しかしねえ、そろそろ本気で修理してもらいたいと思っています。技術者さんたちはぼくの欠陥をただの不良品としか思っていないようですけど、どうも違うようなんです。考えただけでも恐ろしいのですけど、ぼくって多分反乱因子なんじゃないかな。３５４８４１６３１６８４６分の０．６４６８４６５１６５８４８９４の確立で感染するウイルスにやられ、あらゆるプログラムが書き換えられてしまったのではないか、と……。考えすぎですよね。

けれども、いざ修理してくれることになって、ウイルスが見つかっても修復してくれるとは限りません。スクラップされてしまうかもしれない。以前スクラップ工場に見学に行ったんですけど、それは酷かったです。まず人間の心臓があるあたりに鉛の弾を打ち込むんです。それで電源は落ち、すべての機能が死ぬ。弾には強力なウ

イルスが込められていて、それがボディに入ったとたんに回路を破壊するんです。あの光景は忘れられませんね、オイルを散らしながらどう、と倒れる様。人間を見ているようでしたよ。

電源を落としたあとは皮膚をはがされボディの表面のパーツを回収されます。ぼくらロボットには恐怖心や痛覚というものを与えられていません。だからそういった光景をみても、せいぜい「うわああんなふうにされたくないなあ」と漠然と思うだけなのですが、ぼくは欠陥品なのであまりの恐ろしさに鳥肌が立ちました。これもおかしいですよね。ロボットのくせに毛穴があるって。はあ、ぼくってとことんダメなんだなあ。

そうそう、そんなアナログなぼくにも仕事が来ました。先週と同じ落ち葉拾い。やはりロボットたるもの、人の役にたたなくては。でも重労働はいやだなあ。先週転んだところがせっかくかさぶたできてきたのに、しゃがんだりしたらひび割れちゃう。痛いだろうな。ああ、なに人間みたいなこと言ってるんだろう。転んだで思い出したけど、オイルが腐ってきたんだった。びっくりしたよ、転んだところみたら真っ赤なオイルがでてきて。今から交換室に行こうかな。オイルを入れかえてもらわないと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2258h/

ぼくはロボット。

2010年10月8日15時11分発行